

# 書 評



神永正博 (著)

## 学力低下は錯覚である

森北出版(株), 160p., 1,800 円 + 税  
ISBN 978-4-627-97511-8

この本の著者は、いわゆる「苦勞人」かもしれない。略歴によれば、東京理科大学卒業後、京都大学で修士・博士課程から大学に就職し、その後企業に移り、大阪大学で博士(理学)を取得、2004年から現職(東北学院大学工学部准教授)に就任という経歴の持ち主である。失礼ながら、非常によくできる学生というよりは、教授などのアドバイスをあまり聞かずに、能率の悪い研究を突きつめていかれる方なのではないだろうか。とても他人事とは思えない。こんな不器用な著者が、自身の教育現場での経験を元に「学力低下」や「理系離れ」の問題を、さまざまなデータを基に独自に解析したのが本書である。一読したとき、「等身大の現場をよく知る知患者」の見方を感じた。

第1章では、「犯人はゆとり教育なのだろうか?」と疑問を投げかけ、「俺たち、ゆとられちゃってますから」という印象的な書き出しから、最近の大学生の学力低下の実態を取り上げる。著者自身の担当する大学での数学教育での経験から、学生たちの受けてきた教育の問題について述べる。その中で、必ずしもすべての学生の学力が下がっているのではなく、学力の低い学生が増えたことによる講義の効率低下も原因として考慮する必要性を指摘する。

第2章では、従来マスコミによって一般化された(と錯覚されている)「学力低下」は、統計的には、母数の低下(学生数の減少)など、さまざまな問題が存在することを指摘し、「分数ができない大学生」(岡部恒治ら編集, 東洋経済新報社(1999))や「階層化日本と教育危機」(荻谷剛彦, 有信堂高文社(2001))などで取り上げられた、「ゆとり教育犯人説」に反論する。学力低下が若年人口の

急激な低下を主因とし、真に優秀な少数を選抜しようとする我が国の大学の選抜システム、フィンランドなどに見られる成長過程で丁寧に教育する真の意味でのゆとり教育の欠如が原因であることも指摘する。

第3章では、さらに深刻な問題として「理工系離れ」を取り上げる。本会の会員諸氏にとって興味深い内容である。まず、理工系離れは1970年代後半から始まっていること、日本だけでなく世界的な趨勢であることを述べる。特に深刻とされる「物理離れ」を、1996年日本物理学会誌50周年記念号で柴田鉄治が指摘した、「(1)小中高の理科教育が知識の詰め込みになって楽しさを伝えていない。(2)理科系の待遇が文系よりもよくない。」という見解について議論する。ここで著者は、本質的な問題は理系でも医歯薬系(特にバイオ関係)学部への進学率の上昇に反して、物理系(特に工学部)への受験者数の激減であることを指摘する。その理由として、理系学部の中で、医歯薬系学部と電気情報通信等のいわゆる工学系の出身者の賃金に顕著な差があることなどを挙げている。

評者の経験では、労務時間や危険性、情報通信産業での生涯賃金なども勘案すれば、本書のいうほど医歯薬系は工学系より収入や待遇が良いとは思わない。むしろ国家資格を持つことによって、職場や所属組織選択の自由(開業してもよいという気楽さ)を得られることがメリットだと思う。本書では単なる収入の比較だが、もう少し課題の掘り起こしがあっても良かったのではないかと思った。

本書の内容は、いわゆる「読み物」であり、若干の偏向を感じなくはない。それゆえ本書で主張する内容を歴史的に価値あるものとするために、研究者としての著者に学術論文として妥当性評価を受ける努力を期待する。しかし、本書の内容は、本会会員の多くが直面する、理工系離れの原因を反省する資料として、きわめて興味深い。ITバブルが崩壊し、我が国の情報通信の将来を担うべき多くの学生が、国内の電子情報通信の企業を見捨て、外資系企業や金融系企業へと就職していく昨今、来年度50周年を迎える本会でも、「我が国の情報処理学離れはなぜ起こったのか?」という記事を企画する前に資料として参考にすべきかもしれない。

(中川晋一/独立行政法人情報通信研究機構)